

# ネパール仏教におけるヴラタ(vrata)について

スダン・シャキヤ  
種智院大学

ヴラタ(vrata)は法則、誓い、掟、禁戒、断食のような聖なる行為など種々の意味を有する。ヴェーダ時代において、ヴラタはヴェーダ祭式を執り行う際にたてられる誓いであり、儀礼上の祭主が守るべき宗教的な責務として解釈される。一方、ヒンドゥー教においては、種々の現世利益のために特定の日に特定の神を崇拝し、プラーナ文献に由来する物語などを朗読する宗教行為の一つとして発展していく。

13世紀初頭に滅亡したサンスクリット語を中心とするインド仏教はカトマンズ盆地のパバーヤバヒー(仏教寺院)においてネワール文化の影響の下で継承されており、これはいわゆるネパールを代表するネパール仏教である。ネパール仏教ではヴラタがいつから取り入れられたかは定かではない。ただしここで実践されているヴラタにおいては、上述のような沐浴・断食などヴェーダやヒンドゥー教に古くから行われている宗教実践を残しながら独自に展開している。

例えば、無病息災など種々の目的のために、特定の日に、観音、文殊など特定の尊格に対して誓いを立て、地面にマンダラを描いて供養する、ジャータカやアヴァダーナ物語に基づいた説法など一連の修法がヴラタに含まれる。

ヴラタはネパールの現地語ネワール語(非アーリヤ語)では「ダラン・ダネグ」(dhalan danegu)と呼ばれる。「ダラン」はマンダラのことであり、「ダネグ」は建立することであり、即ちネパール仏教ではヴラタはマンダラを建立という儀礼である。その主な特徴を以下で示そう。

①ヴラタ儀礼は、特定の尊格に対して個々よりも老若男女を問わず行う集団的な実践である。②これは主催者の呼びかけで決まった日に一日もしくは二日にわたって行われる。ただし、毎年定期的に行われているわけではない。③マンダラなどを伴う密教儀礼は灌頂などを受けたいいわゆる資格を有する者のみに許される。ただし、ヴラタ儀礼は資格の有無に問わず老若男女誰でも各自が地面にマンダラを建立し、供養する。ただし、その全ては儀礼の根本阿闍梨の指導で一斉に執り行う。④インド仏教の思想の側面を支える種々のアヴァダーナ物語をもって、ヴラタ儀礼の意義、それによって得られる功德などが説かれる。

ヴラタ儀礼にはネパール仏教の思想、儀礼、図像、物語など様々な要素が含まれており、ネパール仏教の縮図とも言える。観音菩薩を本尊するアシュタミ・ヴラタ及びヴァスダーラー女尊を本尊するヴァスダーラー・ヴラタはネパールで最も浸透している儀礼である。そのため、本発表では両者を取り上げ、ネパール現存のサンスクリット語・ネワール語混成の資料を用いてネパール仏教におけるヴラタ儀礼の体系を明らかにする。これは、インドにおいては衰退し、周囲の国・地域に流伝し発展した仏教の解明の一助となるであろう。

キーワード ヴラタ、マンダラ儀軌、アヴァダーナ物語